I-17

1970 年代における近代主義建築批判としての形態理論の展開に関する研究
―日本の建築批評論壇上における「フォルマリズム」の概念をめぐって―
A study on the development of morphological theory as a critique of modernist architecture in the 1970s
―On the concept of "formalism" on the Japanese architectural criticism stage―

○八巻健太[1]，　田所辰之助[2]
○Kenta Yamaki[1], Shinnosuke Tadokoro[2]

This research focuses on the morphological theory developed in the 1970s, and attempts to add a new perspective to the criticism of modernist architecture, which has been the subject of research in recent years. The purpose is to depict the historical character peculiar to the 1970s over the concept of "formalism" through analysis on the stage of Japanese architectural criticism.

１．序論
１-１. 研究目的と背景

本研究は，1970 年代において展開された「形態理論」に焦点を当て, 近年, 研究対象となりつつあるこの時期のモダニズム建築批判に新たな見解を加えようと試みるものである．日本の建築批評論壇上における分析を通じてフォルマリズムの概念をめぐり，1970 年代固有の史的性格を描出することを目的とする.

わが国において本研究が対象とする時代を見たとき通説においては, モダニズムからポスト・モダニズムへの転換期, 保存運動やデザイン・サーヴェイ、コンテクスチュアリズムといった潮流が隆盛したこと，また大衆化という考察軸を中心にモダニズム建築批判との関係の中で論じられている.

このように日本においてはモダニズム建築批判を形態理論として捉えた史的描写が未着手である.

そこで本研究では 1970 年代における「形態理論」をモダニズム建築批判との関係のなかで論じ，日本の建築批評論壇上における分析を通じてフォルマリズムの概念をめぐり，この時期固有の史的性格を描き出すことを目的とする.

１-２. 本研究の史的展望と研究プロセス

まず，形態理論を端的に表すフォルマリズムの概念を，アルド・ロッシを中心としたラショナリズムの運動と伴に追っていく. 次にそこで明らかになった「フォルマリズム」の概念が日本に定着せず, むしろ日本独自の形態理論として展開された過程を，特に形態に関する海外圏の潮流を先鋒したとされる磯崎新と藤井博巳に焦点を当て，形態理論に関して，わが国と海外圏との差異を導き出す. そして日本的文脈におけるフォルマリズムの状況が，モダニズム建築批判のどのような側面を批判対象としたのか考察する.

以上三つのプロセスを経てフォルマリズムを捉え，日本独自のフォルマリズムの状況がモダニズム建築批判と如何に関係するのかを考察し，日本の近代化の特殊性ならび日本の現代建築へと通じる思想の整備がこの時期に確認できるのではないかと考えられる.

２．フォルマリズムの概念
２-１．ラショナル・アーキテクチュア―形態の自律性

アルド・ロッシはラショナリズム運動について「事物の把握, 理解から出発し, 関係性の世界の中に建築を置くこと」と定義し, その上で八束はじめは形態の自律性について「フォルムの問題に光をあて, それを通して意味を語る」ことだと言及し, ラショナリズム＝フォルマリズムの考え方を示した [1]. これは「形態は機能に従う」というモダニズム建築の命題が内容を支える形式の等閑視であったことへのアンチテーゼであることは明らかである．また，エツィオ・ボンファンティが形態の自律性について「社会的機能の系としての自律性を認める」[2]と言及していることから，フォルムは作家の恣意的な言語ではなく、歴史や社会といった「文化的コンテクスト」を表すものだと考えられる．ここからフォルマリズムはフォルムに絶対的価値を置くものではなく，形式（フォルム）と内容の共存関係にあると言える.

２-２．磯崎新の手法論―形式の自律性

磯崎は〈手法〉について「みずからの観念を仮託する形式」[3]とし,「物事の表相部の操作を介して，記号作用部だけを浮かび上がらせる（中略）それと同時に，歴史的諸事実や多領域の土着言語を自由に引用することによって，意味を転化させ，別種の複合的な意味の発生を許容する．そういう意味創出のための方法」[4]だと説明している．その上で自らをフォルマリストと位置付け，形式の自律性を謳う.

磯崎新は手法論を「近代建築批判の私なりの表現方法」

１：日大理工・院(前)・建築　２：日大理工・教員・建築

であると言及し，また「正確に行為されるという過程だけが浮かび上がるため」であり「新しい文脈のなかに建築を構成する諸要素が組み込まれる」と述べている[5]．ここから，磯崎の手法論は，近代建築が設定していたテクノロジーという目的的な主題が，大量生産，大量消費という社会的な生産機構へ組み込まれてしまうことへの忌避であったと考えられ，それが形態の自律性に向かったことは，本研究におけるモダニズム建築批判としての形態理論へと通じるテーマであると考察できる．

２-３．藤井博巳の変形操作―意味の生産

藤井博巳は，理解する意味とは先天的であり，受身であるとし，それは慣習的・実用的な意味につながると言及する[6]．そういった慣習的な意味は，機能主義がその論理の中心に据えた人間をロボットの似姿としたことと共通した問題であり，藤井はここに批判的な態度を示している．

そこで藤井は慣習的なコードを持つ建築形態や，建築を構成する慣習的な規則、また意味そのものを，変形し意味をずらすことで，意味を生産する主体的な存在の獲得を試みている[7]．

３．1970 年代の形態理論を通じた状況

３-１．三つのフォルマリズム

ここで以上にみてきたフォルマリズムとモダニズム建築批判との関係性を整理してみる．

ラショナリズムは社会的機能の系としての自律性を形態に認め，形式と内容の共存から「形態は機能に従う」へのアンチテーゼを示し，磯崎新は意味創出としての手法論が「正確に行為するという過程」を踏むという点において，技術主義的な生産機構への批判を表し，藤井博巳は建築における慣習的なコードを変形させることで主体的存在の獲得を試み，機能主義的な受身の存在を批判した．このように整理するとそれぞれの形態理論が個別の主題に基づきモダニズム建築を批判していることが理解できる．

３-２．日本における形態理論の展開

先に見たラショナリズムの形態理論は、歴史や社会といった文化的コンテクストをフォルムに投影することでその自律性を担保した．しかし日本の都市においてはその歴史の厚みが見られない．それは自然災害や戦争などはもとより，スクラップ・アンド・ビルドや大量生産・大量消費といった社会的な生産プロセスが背景としてあり，磯崎はこの側面を批判した．また藤井は人間と形態の関係性について言及するも，その議論は，施主と建築家の閉ざされたコミュニティの中で行われ，広く発展することはなかった．そして時代は藤井が批判対象とした「理解する意味」という受身な存在，つまり大衆化へと向かっていく．

４．小結

1970 年代において「ラショナリズム運動」はヨーロッパにおける大きな流れであった．それは「形態と意味」の問題であり「人間と建築のコミュニケーション」の問題であった．近代建築が見放したあるひとつの側面，つまり「歴史」や「社会」といった文化的コンテクストの側面を引き受け，それをフォルムの問題にまで次元を引き上げたこれらの運動が，「形態は機能に従う」という標語に対する反テーゼであることからも分かるように，「形態理論」の問題は近代建築へと通じる普遍的なテーマであったと同時に，「形態と意味」や「人間と建築」の関係性の修復によって，その問題を取りこぼした近代建築の片手落ちな状況に対する治療法となった．このように形態をそれ自体の論理で扱い問題提起すること，つまり「フォルマリズム」の形態理論がこの時代要請されてきたのである．

そこで日本的文脈におけるフォルマリズムは磯崎と藤井がそれぞれ体現した通りで，その背景にはヨーロッパの都市や建築に関する普遍的なテーマが日本においては受理されなかったことが共通認識としてある．

明治以降，日本の近代化の過程はそれまでの歴史を等閑視するものだった．そもそも日本の建築は平面と架構の問題であり，「フォルム」は西洋的な問題提起である．日本の近代化はこれらの異種交配であり，このことから 1970 年代において批判すべきモダニズム建築の存在が捉えづらかったと考えられ，この時代の「混沌」とした状況をつくりだす一つの要因になったと考察できる．このことは「形態理論」という西洋的な問題提起によって理解される日本の特殊性であると推察できる．よって現代にまで通じる思想の発露がこの時期に確認できると考えられる．

注）
1) 八束はじめ「表象の海に建築を浮かべよ」『SD』鹿島出版会、1977 年 10 月号
2) 同上
3) 磯崎新「何故《手法》なのか」『a+u』新建築社、1972 年 1 月号
4) 磯崎新「″手法論″から″修辞論″へ，そして…」『新建築』新建築社、1976 年 4 月号
5) 磯崎新「反建築的ノートⅩⅢ 引用と暗喩の建築」『建築文化』彰国社、1978 年 9 月号
6) 藤井博巳「深層的意味へ―表層から深層へ」『建築文化』彰国社、1975 年 4 月号
7) 藤井博巳「変形に向けて-建築の意味のメカニズムを探る」『建築文化』彰国社、1979 年 10 月号

主要参考文献

・松葉一清『近代主義を超えて［現代建築の動向］』鹿島出版会、1983
・布野修司『戦後建築の終焉――世紀末建築論ノート――』れんが書房新社、1995
・磯崎新『建築の解体』鹿島出版会、1997
・五十嵐太郎『モダニズム崩壊後の建築―1968 年以降の転回と思想』青土社、2018
・ハリー・マルグレイブ、デイヴィッド・グッドマン共著、澤岡清秀訳『現代建築理論序説-1968 年以降の系譜』鹿島出版会、2018
・多木浩二「象徴的なるものの役割」『SD』鹿島出版会、1978 年 3 月号
・藤井博巳「建築表現の自立に向けて―負性化への考察のなかで」『建築文化』彰国社、1975 年 9 月号
・藤井博巳「零度の認識(設計メモ)」『新建築』新建築社、1976 年 6 月号
・八束はじめ「エディプスの機械―宮田邸を見て（宮田邸〔設計・藤井博巳建築研究室〕）『建築文化』彰国社、1980 年 6 月号